第四回留学報告書

2015 年度 FOS 奨学生　福井真夫

1　距離感

留学に来てから、一年以上経ってみて、一年目にだいぶ苦労した英語のコミュニケーションにもだいぶ慣れてきた。そうすると言語面よりも文化的な違いで歯がゆい思いをすることに気づく。例えば、教授との距離感だ。僕の育ってきた日本的な感覚でいうと、教授というと恐れ多い存在という感覚なのだが、こちらでは少なくとも建前上はそういう雰囲気を出すべきではない。教授と研究の話をしていて、「興味があったら、こういう問題を一緒にやろうよ」と声をかけられたので、僕はつい日本的な感覚で「僕でお役に立つかわかりませんが…」と返した。教授が即座に 「なんだこいつ」と言わんばかりの怪訝な表情をしたのは忘れられない。廊下で教授とすれ違った時の挨拶なども、日本では軽くお辞儀をする程度だった。アメリカでお辞儀をすればただの不審者であり、「最近どう？」といった日常会話をすることを求められることにも未だに慣れない。良いように捉えると、教授と学生の距離が近い。

2　トランプと経済学

トランプ大統領の当選の前後 1 ヶ月ほどは、クラスメイトの会話の内容の半分ほどはトランプの悪口だった。民主党が圧倒的に強いマサチューセッツ州なので、それ自体は別に何の不思議でもない。しかし悪口が経済政策にまで及ぶのは個人的には不思議だった。トランプの掲げる経済政策といえば、移民の制限、自由貿易の撤廃、大規模な財政政策などだ。僕が学んできた経済学の観点からすれば、こういった政策が良いか悪いのかは全くよくわかっていないように思う。経済学といえば「政府の介入なしに市場に任せるが良い」という表層的な主張だけを切り取られることが多いが、全くそんなことはない。例えば、自由貿易が良いなどという結論は通常の経済モデルからはほとんど出てこない。移民が現地の人の職を奪うという研究も多くあるし、そうでないという研究も同じぐらい多くある。結局、現在の経済学の知識を総動員しても、何かしらの政策が良いか悪いかという判断を下せるレベルに達しているようなものはほとんどない。

経済学を学べば学ぶほど、いかに今の経済学が実際の経済をほとんど理解できていないかというのを知る一方だった。これをチャンスと捉えて精進していきたい。